

シリーズ・編集部座談会《こんな話&あんな話》

作業着の《ニューウエーブ》について再び考える②

【出席者＝本紙編集部一同】

☆作業着はユニフォーム？極度に実用的な服？

司会者 前回の座談会では、現在の作業着は安全面や機能面に優れているだけでなく、デザイン性も優れたものが多くなっているということを出発点に、いろいろな話が出たよね。

記者B 一方で、とくに安全面に関する姿勢が、メーカーによって違っているのではないか。そんな危惧が取材の過程で浮かび上がってきたので、そこを主な論点にして話し合ったわけです。

記者C そうでしたね。ユーザー側の要求も多岐にわたっているのが現実で、それに応えるメーカー側も大変な時代になっていると思います。そんななか、国の安全基準などはクリアしつつ、ユーザーの要望にも極力応え、さらにカッコよさも追求するというのが現代の作業着メーカーの共通姿勢になっている。それはとてもいいことだし、素晴らしい傾向だというのが、私たちの基本的な考え方です。

しかし、ファッション性が重視されつつある現状のなかでは、とくに安全面ということに関して、メーカー間に温度差があるのではないかということでした。

記者B もちろん国の安全基準などはクリアしているわけですから、そのことについてとやかくいわれる筋合いはないにしても、より安全面を重視するモノづくりにシフトしているメーカーと、ファッション性にシフトしているメーカーがあるのは事実です。その両者を比較すると、とくに安全面に関して若干の姿勢の違いが出つつあるのではないか。そのことはもう少し、議論されてもいいのではないかとことを話し合いました。

記者A ただ、これはなかなか比較が難しい問題ですよ。とくに現実問題として、安全面に関して、どこまで基準以上のスペックを求めるとかは。

記者B そうだね。いずれにせよ、ファッション性を追求していく姿勢が強まれば強まるほど、かつてはオーバースペック気味に配慮されているのが当たり前だった、安全性への考え方が、基準さえクリアすればいいというふうになる傾向が一部にあるのは事実のように思われます。それは危険な兆候ではないかという指摘も、実際、一部のメーカーや業界関係者にあるのも事実です。その指摘だけは、すべてのメーカーもユーザーも、忘れないようにしたほうがいいと思います。

司会者 例えば昔は「ヘビーデューティー」というのが男たちの憧れであった時代があって、例えば冬山登山をはじめとする、冒険的な装備としての服をカジュアルに着こなすというのが流行ったよね。

記者C ダウンジャケットだって、元々はそっちから派生しているわけですよ。例えばそのダウンジャケットをひとつとっても、ヘビーデューティーを追求するというよりも、全体にオシャレなファッション性への志向が強くなっている。いわゆるライト感覚になっていますよね。

記者B ラグビーのジャージがカジュアル化して、タウン用のラグーシャツになっていったのと似ています。一部の作業着メーカーには、安全面への配慮は怠らないまでも、傾向としてはちょっとそれに近くなりつつあるのではないかという感じは確かにします。

司会者 建設現場ではなぜ作業着を着るのか。あるいは、着ないといけなのか？

建設現場と作業着の組み合わせは当たり前になりすぎていて、かえってそういう根本的な部分が忘れられているということはあるかもしれないね。

記者B そういう意味では、作業着はおそろいでなければいけないのか、という問題もありますよね。

記者C そうですね。そのあたりの考え方も、電気工

事業者によって、さまざまです。

記者A 作業着をユニフォームと考えるか、実用的な服装と考えるかによっても、異なりそうだね。

☆作業着の選び方と働き方改革をつなぐモノ

司会者 昔は会社への忠誠心や帰属意識を高めるアイテムとして、作業着が考えられていた。それはまさにユニフォームだよ。それを着ることに、社員も誇りを持っていた人が多かったからね。実用的かつ精神的な効果が、ユニフォームとしての作業着にはあった。

記者B 作業着というジャンルについて、欧米ではユニフォーム的効果よりも、安全なものを着るべきで、そのためのものだという考え方が強いようですね。

司会者 なるほど。だから向こうでは、作業着は別に必要以上にオシャレでなくてもいいし、おそろいでもなくてもいいという考え方も出てくるわけだね。

記者C それはあるかもしれませんね。全体的に実利を重んじる傾向が強いですからね、日本より欧米は。

記者A 賛否両論ある働き方改革についても、形を追求するのか、実利を追求するのかという部分で、企業の受け取り方も分かれそうですよね。

司会者 おお、それはいえるね。例えば数値的目標としてだけの「残業減らし」なら、中間管理職などが犠牲になれば割と短期的に達成できる。

じゃあ、残業を減らして、自由時間を得た社員が、会社以外の時間をどう過ごすのかということになると、困ってしまう人も多いのではないかな（笑）。

記者C 労働時間を欧米並みにしようというのは分かりますが、会社以外の時間の過ごし方の上手下手というのは、文化の違いが出てきそうですよね。

記者A それがいちばん端的に出るのは、バカンスの取り方や過ごし方。欧米では数週間のバカンスをもらえれば、嬉々として過ごせる方法がいっぱいありそうだけど、日本人は困ってしまうでしょうね（笑）。

司会者 それは本当に、文化の違いだよ。一事が万事で、さっき出た作業着に対する姿勢も、欧米と日本では文化的レベルで志向が違う。ユニフォームなのか安全第一の服装なのかということも含めて。

それは日本国内の企業の間でも、経営者の考え方や

社風によって、文化的レベルで違ってくる。どっちがいいか悪いかということではなく、ね。

記者B 国がいま推進している働き方改革の最大の弱点も、その部分での議論がまったくされないまま、単に数値的目標を国が立てて、それを各産業界に丸投げし、半強制的に達成させようとしていることだと思います。

記者A 成熟社会に突入している日本では、働き方改革はいろいろな意味で必要だと思うけど、そのアプローチがいかにも強引だし、皮相的ですよ。

始めて間もないのに、学力低下を招いたという理由で目の敵にされ、頓挫してしまった「ゆとり教育」こそは、実は働き方改革を根本的に達成するための方法だったような気がします。

司会者 「ゆとり教育」というのはある意味、バカンスをいきなり与えられても困らない、そんな国民を育成する教育方針ともいえるしね（笑）。それに「ゆとり教育」を止めて授業時間を増やせば学力が上がるという考え方は、たくさん働けば生産性が上がるし、労働時間が短いと生産性が下がるという考え方と、どこか似ているような気がする。

記者B それは働き方改革とは真逆ですよ（笑）。やっていることがチグハグというのか、大枠の部分での一貫性がない。

司会者 作業着の安全性の話から、話はあちこちに跳んでしまったけど、本質的な部分で、それらはつながっていると思うんだ。作業着であろうと働き方改革であろうと、何をどう追求していくのかという命題に対するアプローチは、やはりその目的の本質は何かということを出発点にして決めないと、結果的に形だけのものになりかねないということだからね。

記者C 本当にそうですよね。

記者A なんだか、支離滅裂になりかかった議論を、強引にまとめたような感じもするけど（笑）。

記者B 座談会というのは一種のブレインストーミングだからそれでいいのでは？

司会者 そうそう。そもそも最初から明確な結論の出るテーマは選んでいないからね。あちこち跳んで、盛り上げればいいんだよ、この座談会企画は（笑）。